生涯学び続ける力を育てるために

― 子どもの言葉（会話）からの分析 ―

〇松尾真理　　＃玉木健弘
（神石高原町立保育所）　（武庫川女子大学文学部）

問　題

個人行動から集団行動へと行動面の変化により、他児とのトラブルも増加する。低年齢時では、一人遊びでも問題はなかった幼児が、加齢とともに、他児とも関わりを持ちたくなり、その結果、トラブルに繋がることもある。このトラブルを引き起こす要因は、加齢に伴う行動の変化以外にも様々な要因が考えられる。その中の一つに発達面の課題も考えられる。

幼少期の発達は、個人差が生じやすく、他児とのトラブルが発生しやすい。そのため、一人一人の発達を見極めたうえで、保育を実践することが重要となる。そこで、本研究では、発達に遅れがある幼児への関わり方および他児とのトラブルを減少させる保育の検討を行った。

方　法

対象児：公立保育所に通所する 4 歳児 A 子（女児）であった。

クラス集団：4 歳児クラス 8 名（男子 4 名、女子 4 名）であった。

実施時期：X 年 3 月から 10 月の 6 か月の中で、行動観察を断続的に実施した。

行動観察：行動観察は、日常保育の中で実施した。保育士が対象児との関わりの中で、行動を観察し、保育終了後に対象児の行動を想起して記録した。行動観察は、同じクラスの幼児との会話場面を中心に行った。

結　果

保育場面の行動を観察して、保育終了後に行動を想起して次のように言動を分類した。①相手の反応を引き出す言動、②相手の発語に対する言語反応（応答も含む）、③相手の発話内容に応じ適切な言語反応、④相手の発話に関係なく一方的な発語の 4 種類に分類し、どの言動が多く観察されたかについて検討を行った。

その結果、①の相手の反応を引き出す言動と④の相手の発話に関係なく一方的な発語が多く見られた。これらの言動は、他児との関係を悪化させる可能性がある。そのため、②相手の発語に対する言語反応（応答も含む）と③相手の発話内容に応じ適切な言語反応の 2 種類の言動を向上させる必要があると考えた。そのため、A 子と他児とが、争うことなく遊びを共有できるように保育士が A 子と幼児の間に入り、次のような支援を行った。

支援 1：友だちがどんな気持ちで A 子に話しかけているかを保育士が A 子に分かるように伝える。

支援 2：保育士が遊びの中で、A 子が話した言葉を繰り返し、A 子と会話をしている他児に、A 子の思いが正しく伝わっているか確認する。

以上の 2 つの支援を実施した。

その結果、今回の支援を通して②および③が増加した。このことから、保育士が支援をすることで、A 子は相手の発話内容に応じて適切な言語反応を行うことができ、他児とのトラブルが減少した。

考　察

保育場面からの行動観察をした結果、A 子の会話の特徴は、独り言や相手の発話の繰り返しが多いことが明らかとなった。また、他児から声をかけられ時の対応については、相手の質問に対して反応しない事や他児の声が聞こえないのか独り言を発していた。このことから、対象児一人では、他児と適切な関わりを行うことが難しいと判断し、支援を行った。

支援を実施した結果、対象児と他児とのもめ事が減り、他児との関わりも増加した。このことから、保育士などの支援者が、幼児の発達段階と会話能力を見極めて必要な支援を行うことは、対象児だけでなく他児に対しても効果があることが示された。

しかし、必要以上に保育士が幼児の間に入ることは、幼児の言語能力の発達を妨げる可能性もある。保育士は、幼児の得意な部分と苦手な部分を把握するだけでなく、所属集団の特徴を考えた上で支援方法を考え、子どもの発達について理解し、一人一人の発達過程に応じて保育すること（厚生労働省，2008）が重要である。

そのため、今後さらに日常の行動観察はもとより、個別支援計画といった保育計画の設定や保育士間の情報交換などが保育実践の中で必要になってくると考える。